

Title	GLOCOLブックレット10 はじめに
Author(s)	思, 沁夫
Citation	GLOCOLブックレット. 2013, 10, p. 3-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48401
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

はじめに

思沁夫 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授

本書は、組織的な大学院教育改革推進プログラム「健康環境リスクマネジメント専門家育成」海外交流プログラム(以下“海外交流プログラム”)の一環として、2010年および2011年に日本と中国で実施された研修および国際交流活動をまとめたものである。

日中両国に関する海外交流プログラムは、日本と中国の学生と教員がお互いにまさに交流できるようにデザインされている。日本からは、中国の山東省(2010年8月)、雲南省(2011年8月)に赴き、食品衛生管理、食品安全に関する現地調査を実施した。他方、中国からは、2010年11月と2012年1月に大阪大学で開催された国際シンポジウム及び研修プログラムに参加し、また大阪府や水俣市などで食と環境に関する現地調査を大阪大学の学生と一緒に行った。さらに、中国北京市で、「グローバル化と環境・食品安全に関する国際シンポジウム」(2011年3月)と「Japanese-Chinese Student Symposium: Learning through Field Study and International Exchange 日中学生シンポジウム海外調査・国際交流で得たものは」(2011年12月)などを開催した。

海外交流プログラムの実施は、大阪大学、中国農業大学、雲南省財経大学などの学生と教員に多くの学びをもたらしただけでなく、食・環境分野に関する日中交流にも「添磚加瓦」(微力ながら力を尽くすこと)ができたと感じている。特に、日中間で起きている食品安全に関する問題(例えば、“毒餃子事件”など)が、外交問題(政治問題)化することで、しばしば共同調査および研究の実施を大変難しいものとしている。こうした現状を考えると、今回の研修・交流及び成果の共有は意義深いと言える。

しかし、一方、研修・交流活動はどのように実施され、本海外プログラムで抱えた目標は達せられたのか。今後の海外研修・交

流のため、改善点はなかったのか(学生たちも含めて)。こうした目的から、本書は、実際行なった研修・交流活動の成果を示すと同時に、研修・交流が実際どのように行われたのかを記述し、研修・交流中に感じた、気付いた点をまとめて紹介する。

具体的には、本書は以下のように構成されている。「第一部」では、海外研修プログラムの概要と実施された研修、交流活動の概観を紹介する。「第二部」は、大阪大学の学生たちが中国で行った研修・交流活動の記述と学生たちが研修・交流活動を通じて感じたこと、考えた、実際得られた収穫を学生自身がまとめたものからなっている。「第三部」では、中国農業大学と雲南省財経大学の学生、教員が日本で参加した研修・交流活動をまとめている。中国農業大学の学生は、日本における研修・交流活動に参加した。また、中国農業大学と雲南財経大学の教員は、大阪大学で開催された国際会議に参加し、発表を行なった。この部分では、その成果を文書やパワーポイント資料の形で紹介する。また、2011年3月と12月北京で実施された国際会議には、中国農業大学をはじめ、多くの学生や教員が会議に参加し、会議後、学生と教員から感想や意見が寄せられた。そのうちの一部分を日本語に編訳して紹介する。

本海外プログラムでは、専門性を超えて、また、言語や文化を超えて交流し、食や環境問題をテーマに現地調査し、問題を分析する、さらに成果をできるだけ共有する、あるいは調査地に伝えることを努めた。研修についての記述、学生たちの感想文から、その目標はある程度達せられたと考えている。しかし、一方様々な課題もあったと感じている。例えば、学生の感想文にもあったように、すべてが用意されたコースに沿って実施されるため、学生たちが主体的に調査内容を設定し、取り組むことが困難となった。また、日程設定上、学生たちが同じ場所を再調査する、あるいは、ある問題に集中して考える時間が、調査中は得られにくいため、表面理解にとどまる場合が少なくない。

私たちは、研修成果を共有すると同時に課題も検討する必要があると感じ、できるだけ調査の過程を詳細に記述し、学生に書かせた感想文も、大きな修正を加えずに彼らが研修や交流で感じた、考えた状態に近い形でまとめた。いずれにせよ、今後は経験が生かされると同時に課題が再検討され、そして改善され

ることを期待したい。

編者のもとには、海外交流プログラムの報告書をぜひ読みたいという声が、中国農業大学、雲南省財経大学などの学生から多く寄せられている。残念ながら、現段階では日中両語で出版する予算と時間的な余裕がないため、日本語版のみの出版と成らざるを得ない。中国語版の出版は、中国側の協力大学と相談しながら考えたいと思う。

2012年1月25日